

海外・現場最前線 からのお便り

海外で活躍する林野庁職員の近況を
シリーズで報告します

地域が主体となった 森林生態系の保全を目指して



 ホンジュラス共和国

JICA ラ・ユニオン生物回廊プロジェクト
チーフアドバイザー

徳川 浩一



南 北アメリカ大陸を繋ぐ中央アメリカの地峡に連なる国々の一つであるホンジュラス共和国は、カリブ海沿岸は熱帯雨林気候や熱帯モンスーン気候、脊梁山脈以南はサバナ気候に属しています。鮮やかな色彩の鳥ケツアールや大型のネコ科動物ピューマなど様々な野生生物が生息する自然が豊かな国であり、また、世界遺産に登録されているマヤ文明のコパン遺跡もホンジュラスにあります。

森林面積は約631万ha(森林率56%)あり、沿岸地域にはマングローブ林、北部から東部にかけての湿潤な地域には広葉樹林・針広混交林、中央高地を中心とする乾燥した地域にはマツ林、低木性の乾燥林(落葉広葉樹林)が広がっています。しかし、農地開発等により2016年までの16年間に於いて年間2.1万haの森林が減少したほか、森林火災や穿孔虫による被害も頻発し、特に森林火災については2019年までの過去10年間において約5.7万ha/年もの森林が被害を受けています(写真1、2)。

国際協力機構(JICA)が2016年から開始した技術協力プロジェクト「ラ・ユニオン生物回廊プロジェクト」は、森林生態系を取り巻くこうした困難な状況を背景としてホンジュラス政府が推進する生物回廊※施策を試行的に実施するとともに、回国の環境省(Miambiente+)、林野庁(ICF)、関係市の施策運営能力の強化を図ることを目的としているものです。

本プロジェクトの現地サイトであるラ・ユニオン生物回廊は、エル・パライス県ユスカラン、グイノペ、オロポリの3市を主体とする約72千haの区域であり、首都テグシガルパの東南数10kmに位置しています。同回廊は、ユスカラン生態系保護地域及び複数の指定水源林が中核として構成されており、高標高の地域ほど湿潤な気候と

※[生物回廊]:二つ以上の保護地域、国立公園等を接続し、これら中核となる区域と接続する区域全体の生物多様性の保全や生態系サービスの維持等を目的とした森林施策。地域の関心を有する者の発意により設定申請するものとされている。



3 ユスカラン市の風景



1 ユスカラン生態系保護地域の際まで迫る農地



2 ユスカラン生態系保護地域に迫る火災



5 自動撮影カメラで撮影されたピューマ(Puma concolor)



4 ラ・ウニオン生物回廊のマツ林



なっているため、上流から雲霧林と呼ばれる常緑広葉樹林、マツ林、乾燥林と様々な森林生態系を観察することができます(写真3、4)。

一方、ラ・ウニオン生物回廊区域は私有地、公有地も多く利害関係は複雑であり、また、森林地帯の中にも広く居住・農耕の実態があります。したがって生物回廊の取り組みを推進するためには、野生生物の管理活動に着目するだけではなく、区域内での様々な生業を許容しつつ、地域住民が魅力的と感じる生物多様性保全に資する取り組みを創出していくことが重要と考えています。

こうした前提の下、本プロジェクトにおいては、自動撮影カメラを使った野生動物の調査(写真5)と併せて、住民自らが実施可能な森林保全対策や山間部で盛んなコーヒー栽培にかかる環境配慮の取り組み(写真6)など、いずれも住民や市の職員の関心も高く、彼らが主体的に取り組める活動を企画し、その具体化を進めています。

例えば、水源林の保全と一口に言っても、湿潤な上流域の集落では森林の農地転用のニーズが強く、乾燥した中下流域の集落では水資源保全の希望が高いため、集落がばらばらに対策を推進しても効果はあまり期待できません。このためプロジェクトでは、取水源の保全管理のため従来から存在していた集落単位の水管理組合をベースに、流域の関係集落に呼びかけ協議会を設立、活動計画を設定して流域内で一体となった森林火災予防活動(写真7)を実施し、水源林保全の一モデルとして育てつつあります。

生物多様性の保全と住民のニーズ、途上国の中で、この二つの課題を同時に満たす新たな仕組みを生み出すことは喫緊の課題であると考えています。プロジェクト終了までにごこうした取り組みをさらに進め、一冊の普及資料として取りまとめ、ホンジュラス、さらにはその周辺国へも普及していくことを目指しています。



7 森林火災予防キャンペーンで各市が大型のバナーを作成、各集落に掲示した



6 環境に配慮したコーヒー栽培を進めるため、ホンジュラスコーヒー協会(IHCAFE)と連携して地域住民を対象とした研修を実施